ユーラシアンクラブ　ニュースレター第 185 号 2023 年 10 月 30 日
ユーラシアンクラブ　ニュースレター／ユーラシアは一つ　加藤　九祚　ユーラシアンクラブ　ニュースレター／対話の道を模索する　服部英二

ユーラシアンクラブ　オンライン

「ユーラシアは一つ」「心はいつも旅する」「生きるというのはとにかくいいことだ」
シベリア抑留をシベリア留学と受け止めた人：加藤九祚（初代ユーラシアンクラブ名誉会長）
―2016 年 9 月 12 日、中央アジアで仏教僧院遺跡発掘中に逝去 94 歳―

【ユーラシアンクラブ創設 30 周年を機に新名誉会長は、
服部英二・ユネスコ本部主席広報官、文化担当特別事業部長

服部英二さんは 1973 年から 20 年間、パリのユネスコ本部で主席広報官、文化担当特別事業部長などを歴任、「シルクロード・対話の道総合調査」を企画実施、世界遺産の原点となった「人類の共有遺産」、「文明間の対話」、「文化の多様性」 など平和へのメッセージを発信し続け 1994 年ユネスコ退官後もマイヨール事務局長顧問、松浦晃一郎事務局長官房特別参与として活動した。1986 年から発足させた「科学と文化の対話」シンポジウム･シリーズの集大成を 1995 年に国連大学で開催、2005 年パリ・ユネスコ本部から「文明間に通底する価値」を世界に発信した。フランス共和国から学術功労章パルム・アカデミック・オフィシエ位を受勲。加藤九祚先生には上記シルクロード調査の諮問委員を依頼、「加藤先生は人類史における中央アジアの空白を埋めた人」 と敬意を表している。「タジク・ソグドの黄金遺宝」日本語版では「秘められたシルクロード」 のサブタイトルを提案し、本書の意義を明確にした。

【ユーラシアンクラブ創設 30 周年（2023 年 2 月 10 日）記念事業】

Ⅰ　「加藤九祚記念館　対話の館」及び「加藤九祚記念　ユーラシアは一つ　ユーラシア・シルクロード文化村」を設置
　　二か所に加藤九祚顕彰碑の設置

Ⅱ　歴史・文化・多様性に敬意を―国家民族宗教を超えて、ユーラシア・アジア・自然との共生を模索する
　　ユーラシアンクラブ　オンラインの創設

特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ　名誉会長　服部英二

会　長　大野遼　元メディア記者
副会長　井口隆太郎/(株)井口産業社長副理事長
理事長　江藤セデカ/（特非）イーグル・アフガン理事長
副理事長　浦川治造/東京アイヌ協会名誉会長
副理事長　冨川力道/モンゴル・ブフクラブ代表

【加藤九祚記念館協力委員】記念館の活動に助言、協力します

A.P. デレビャンコ：ロシア科学アカデミー会員（デニソワ洞窟発掘主宰・デニソワ人発見者）
V.I. モロージン：ロシア科学アカデミー会員（アルタイパジリク王墓発掘プロジェクト担当者）
S.R. ピダエフ：ウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所長（カラテパ仏教僧院遺跡共同発掘者）
吉田憲司：国立民族学博物館館長
須藤健一：国立民族学博物館名誉教授（前館長）
佐々木史郎：国立アイヌ民族博物館館長
伊東一郎：早稲田大学名誉教授（ロシア・ウクライナ研究者）
佐藤宏之：東京大学名誉教授
浦城幾世：井上靖記念文化財団専務理事
藤本和喜夫：大阪大学名誉教授（元大阪経済法科大学学長）
橋本強司：レックス・インターナショナル会長
関根正男：アフガニスタン文化研究所会員
黛泰次：日本ロシア協会常任理事・事務局長
佐々木三知夫・秋田日ロ協会理事長
塚田昌弘・元宇都宮市市議会議長
野口昇・野口研材商会相談役
増渕宏和・増渕石材商店代表取締役
長谷川賢太郎・さがみ水産代表取締役
桜井謙治・元霞ヶ浦漁協副組合長
千葉隆司・かすみがうら市歴史博物館館長
藤井雅敏・アグリ藤井代表取締役
鈴木文雄・鈴木水産前代表取締役

加藤先生が中央アジアで発掘した小ストゥーパ（S.R.ピダエフ復元図）

☜ピダエフさん

☜デレビャンコさんモロージンさん

加藤九祚先生の祝福された記憶を記念するためのイニシアチブを歓迎し、加藤九祚記念館協力委員として我々二人の名前を記載することに賛同し、我々にとって光栄です。この崇高な大義の成功を心から祈っています。
A.P. デレヴァンコ・ロシア科学アカデミー会員
V.I.　モロディン・ロシア科学アカデミー会員

ユーラシアンクラブ　ニュースレター第 185 号 2023 年 10 月 30 日

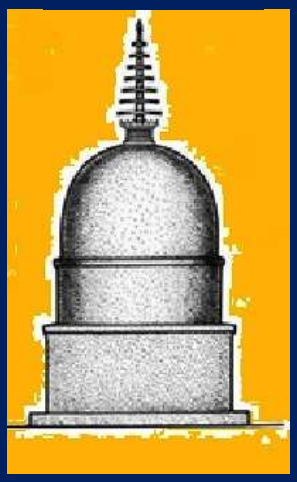
加藤九祚顕彰碑

顕彰碑建設にご理解とご支援をお願いします。
ご寄付の振込先は郵便振替：00190 -7-87777 ユーラシアンクラブ／
銀行振込の場合：ゆうちょ銀行〇一九店当座預金 0087777 ユーラシアンクラブ

シベリア抑留・ロシア科学アカデミー名誉歴史学博士

ユーラシアは一つ

心はいつも旅する



人類史の中央アジアの空白を埋めた人
／服部英二・元ユネスコ本部主席広報官

① 5 年間のシベリア抑留を経て、「シベリア留学」と受け止め、「ユーラシアは一つ」とアピールした加藤九祚（ロシア科学アカデミー名誉歴史学博士、国立民族学博物館名誉教授）先生を顕彰する「加藤九祚顕彰碑」を設置したい。

② 加藤九祚記念「ユーラシアは一つ　ユーラシア・シルクロード文化村」を茨城県に設置したい。

● 皆様のご援助をお願いします。　　／　前頁が顕彰碑の最も新しいイメージです。

整備中の「加藤九祚記念館　対話の館」ユーラシアンクラブオンラインの拠点

私大野遼は、人類史には「表」と「裏」の 2 つの営みがあると考えている。

（「表」の人類史）特に 4 千年前以降、「表」の歴史は、男性優位の集合体（国家民族宗教）のリーダー（部族長、王）が①武力（正規兵、傭兵、スパイ、武器／弓矢・刀剣・槍・弾薬・原爆、馬・戦車、戦艦、汽車、航空機、大砲・ミサイル・ロケット・ドローン等々）と②都合の良い帰属イデオロギー（正義；自由と民主主義、ゾロアスター教、アブラハムの宗教、儒教、仏教、バラモン教・ヒンズー教、混合宗教であるマニ教などシャーマニズムを含む）を、人のしがらみ=帰属イデオロギーとして利用し、③正義の旗を立てた男の帰属イデオロギー＝ナショナリズム=ナルシズムを上書きする＝異民族（周辺地域の人々）を侵略する興亡の人類史を刻んできた。目的は、資源と奴隷を略奪、縄張りを宣言するならず者の人類史だったと考える。マフィア、やくざ、暴走族の首領、組長、総長、番長が縄張り＝島を競う世界と変わらない。男系優位のならず者結社の人類史が続いている。特にオスマントルコが東ローマ帝国を滅ぼした 1453 年以降、南北アメリカ、アフリカ、アジア地域で略奪、虐殺、人を奴隷化してきた現代に及ぶ人類史は深刻だ。私は、第一の植民地帝国は（ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランス、ドイツ等の西ローマ帝国の子孫たち／ラテン語とカトリック系キリスト教信奉者たち）、第二の植民地帝国がアメリカ、第三の植民地帝国がロシア・ソ連（東ローマ帝国の子孫／自称;キリール文字と東方正教会信奉者）、第 4 の植民地帝国が日本、第五の植民地帝国が中国（中共）と考えている。第三の植民地帝国日本は、日露戦争までは第一、第二、第三の植民地帝国からアジアを解放するという「大アジア主義」を掲げていたが、孫文は漢族の復興を掲げ、ロシア・ソ連との連携に動き、「大アジア主義」は破綻。日本は、日露戦争後 1905 年日米の秘密協定（桂・タフト協定）、1907 年以降日本とロシアは北アジアの日露の縄張りで秘密協定を交わし（日露協商）、フランスとも日仏協約、等アジアの植民地分割協定を交わし、日本は第四の植民地帝国に変貌した。日露戦争を契機として、ユーラシア大陸の西端でも英、仏、露三国の間でオスマントルコの支配地域を中心に植民地分割支配の協定が交わされ、16 世紀にはじまった東西ローマ帝国の子孫たちが繰り広げた植民地帝国の時代は終焉し、旧植民地帝国崩壊の時代（第一次大戦、第二次大戦／大東亜戦争）に入った。日本は第二次上海事変を機に支那事変に深入りし、さらに英米との自衛戦争に挑み敗戦し、第一（英国等）、第二（米国）、第三（ロシア・ソ連）の植民地帝国の間の緩衝国となり、第四の植民地帝国日本は封印された。第五の植民地帝国中共が支配する中華人民共和国は、第二の植民地帝国米国を、また第一の旧植民地帝国の支配地域に影響力を拡大し、第三の植民地帝国ロシアを凌ぐ勢いとなっている。イスラエルはローマ帝国の原罪の贖罪で誕生したが、ならず者が支配する第六の植民地帝国となったと考える。人類の未来について別号で触れる。

（「裏」の人類史）男性優位のならず者の「表」の人類史の狭間で、辛酸を味わった女性、子ども、老人そして奴隷とされたり、意に反して兵となった人々の苦渋苦行、リーダーに反目する王族、部族長、翻弄される農民、商人、職人、リーダーの傍で記録した人や詩人や音楽家、そして何よりも常に存在した反逆する集団、離散逃散する集団が現れた。国家民族宗教的集合体のリーダーが利用した武力、イデオロギーは、内部的反逆の手段ともなり、新たな異なったイデオロギーが反逆者集団の手段として登場することも起きた。ユダヤ教（及びアブラハムの宗教）、ヒンズー教の「マヌの法典」、仏教、儒教、など人の帰属イデオロギーとして利用された思想においては、女性は男性の支配を受ける存在として描かれているが、実際の男系部族社会の現実が宗教に反映されたと考える。しかし女性は、男系優位の国家民族宗教的集団の興亡の鍵を握っていた。アケメネス朝ペルシャ、ササン朝ペルシャで重要な役割を果たしたゾロアスター教が国家イデオロギーとして影響力を持つきっかけとなったのはゾロアスターの娘がおそらくホラーサーンの王であったウィシュタースパ王の宰相と結婚してから「信者」の数が増えた。ゾロアスターもウィシュタースパーもソグド人。中央アジアでヘレニズムの旗手となったセレウコス朝のアンティオコス一世の母はアレクサンダーを中央アジアから撃退したソグド人スピタメネスの娘アパマであった。ソグド人のグローバルビジネスの継承者ウィグル人の力を良く認識していたチンギスハンが、帰順してきた天山ウィグル王国のバルチュク・アルト・テギンに娘を娶らせモンゴル王族に準じる「第五の駙馬王家」とし、中国でも中央アジアでもウィグル族が影響を及ぼすがウィグル王家にモンゴル王家から降嫁した女性は代々「高昌公主」と呼ばれた。また現代の植民地帝国崩壊を象徴する侵略戦争の一つとなっているウクライナ戦争の背景には「ピョートル大帝」以来の「強い大ロシア主義」があり、起源は、モスクワ公国のイワン 3 世がビザンチン帝国のコンスタンチヌス 11 世の姪ソフィアを妻として娶り「ローマ帝国の継承者」となって以来、左記第三の植民地帝国のナショナリズムの支えとなっている。西ローマ帝国継承国家における政略結婚は通常に行われ、人類史に女性が、国家民族宗教的集合体の、破滅の歯止め、文化の継承、ナショナリズムの拠り所となった。男性優位の人類史の核となる父系家族の起源については、類人猿にまで遡って探る論調もあるが、私は農耕文明の中から派生した雑穀農耕を伴う牧畜社会の男系家族部族が連合集合体として拡散を始めたアファナシェヴォ、アンドロノヴォ文化の人々が地球規模の寒冷化乾燥化に伴って東西及び南方に移動した時期が画期と考える。別号で触れる。

情報提供　「植民地」という名の縄張り。やくざや暴走族の「シマ」と変わりない。日露戦争以後日本は縄張り争いに参加した。北ではロシアの中央アジア支配とアフガニスタン・極東支配と、南ではイギリスのグレートゲーム。▶　イギリスは 1840 年にアヘン戦争で清国に香港を割譲させ、ロシアはどさくさ紛れの北京条約（1860 年英仏の天津条約仲介）でアムール川左岸、沿海地方を取得➡「大国（ならず者国家）」に対抗したのが日本。

（ロシアナショナリズムの起源＝歴史をつなぐ女性）1453 年オスマン帝国のメフムト 2 世は東ローマ帝国（ビザンチン帝国 395-1453）のコンスタンティノス 11 世を滅ぼした。モスクワ公国（1263-1547、後のロシア帝国；ピョートル大帝以後）のイワン 3 世がコンスタンティノス 11 世の姪ソフィアを二番目の妻として娶り、「ローマ帝国の継承者」「モスクワは第 3 のローマ」と称し、モスクワ・ロシアのアイデンティティが誕生した。1480 年キプチャクハン国＝ジョチウルスの支配（タタールの軛）を脱し、モスクワ・ロシア自立の画期となった。その孫のイワン 4 世（イワン雷帝）は、敵味方を問わず殺戮を行っており、後にスターリンが崇拝するツァーリだったという。1581 年にはシビルハン国征服事業を行った。これを機にロシアのシベリアに侵攻する。クロテンなど毛皮の獲得が目的オホーツクとアナディルに要塞が建設された 1649 年がシベリア征服の完了とされる。私が、シベリア少数民族の取材で訪れた際に「ロシア人は、そこ（シベリア）に人はいなかった」とシベリア侵攻を正当化した、と聞いた。人口希薄なウラル山脈の東にまずオレンブルグ要塞、カザフスタン北部の山地に要塞を点のように築き、縄張りを示し、毛皮を求めてシベリアを侵略した暴走族の縄張り宣言と弱い者いじめでシベリア征服。日本は「海洋国家」の利があった。

（●ロシアの中央アジア侵略とパンジデ攻防）

東ローマ帝国継承国家のアフガニスタン要塞占領

1840 年代から、ロシアは中央アジア・カザフスタン、キルギスタン作戦にかかり、

1865 年タシケントを陥落した。その後サマルカンド、ブハラ、フェルガナ（コーカンドハン国）、を軍事支配し、

1870 年代にはアフガニスタン北部バクトリアを攻略。

70 年代の後半、カスピ海方面からトルクメニスタンに侵攻し、1881 年 1 月ギョクテペ要塞の戦いで中央アジア支配を完了した。

1884 年、テジェン、メルヴを占領、

1885 年 3 月には、アフガニスタン国境のパンジデ要塞を占領し、大英帝国の権益を脅かした。イギリスは戦争への準備をしたが、ロシアは後退し、アフガニスタンの北西国境が定まった。

ロシアはその後パミールに侵攻したが、イギリス領インド帝国の外相モーティマー・デュアランドは 1893 年第三の植民地帝国ロシアとの間でゴルノバダフシャン南ワハーン回廊からイランまで、アフガニスタンを緩衝国とする国境線＝デュアランドライン（英国領インド＝現パキスタンとアフガニスタンの国境）を、当時のアフガニスタン国王アブドゥッラフマーン・ハーンに調印させた（国王は英語を理解しなかったが、条約は英語のみ）アフガニスタンの悲しみの元凶である。

（●ロシアによる対馬占拠事件）1855 年日ロ和親条約（樺太を雑居地、択捉島と得撫島の間を国境=下田条約）1859 年日露修好通商条約を交わした（批准）にも関わらず、海軍大臣コンスタンチン大公の指示で 1861 年ロシアの軍艦が修理を名目に対馬来航、工場、練兵場などを無許可で建設、藩主の許可で租借地を確保しようとした。対馬—長崎—江戸—箱館（駐箱館ロシア領事）で穏便な退去に努めたが、ロシア側は番所の襲撃、警備兵の殺害、住民拉致、略奪と挑発、外国奉行の抗議も無視。安藤信正は、イギリス公使オールコックの提案でイギリス東洋艦隊の軍艦二隻が対馬に回航、ロシア側に抗議。安藤は箱館奉行を通してロシア領事に抗議し、半年後ロシア軍艦は対馬から退去した。オールコックは本国に「対馬占領」を提案していた。（ビリリョフ中尉軍艦ポサドニック号事件）。イギリスは 1863 年「彦島租借地」事件も！？。

（日露戦争の伏線）

1894 年の日清戦争後の下関条約（朝鮮の独立、遼東半島、台湾、澎湖諸島の割譲）にロシアが主導して露仏独が三国干渉（1896 年）。その後李鴻章がモスクワを訪問、ロシアから賄賂をもらい露清相互防衛条約、鉄道敷設権、などどさくさに紛れた支配（縄張り）を拡大、1898 年には旅順、大連租借露清条約で下関条約に言いがかり（三国干渉）をつけて日本の「戦果」を奪った。「朝鮮介入」も示唆した。

「イーグル・アフガン明徳カレッジ」開校！

『ウェッブ・アフガン』11 月 5 日 2023 情報 https://webafghan.jp/ea_afghan_meitoku/

「イーグル・アフガン明徳カレッジ：ایگل افغان میتوکو کالج」が 11 月 4 日、岳校法人千葉明徳学園（福中儀明理事長、千葉市中央区南生実町 1412 番地）で開講された。NPO（特定非営利活動法人）イーグル・アフガン復興協会（江藤セデカ理事長）との共同事業として実現した。

この事業は、以前から日本に難民として居住している、あるいはターリバーン復権後日本に避難してきたアフガン女性らへの日本語教育。両法人も実際にカレッジを運営する日本語の先生方も事務方もすべて非営利のボランティアで運営される日本初の画期的な事業という。日本で暮らすアフガニスタン難民は 5 千人あまりそのうち 4 割が千葉県で暮らすという。日本語教師、スタッフ諸経費計 80 万円ほど必要で、支援金を募集している。

■三菱 UFJ 銀行■　店番：051　口座番号：1117116　口座名：イーグル・アフガン復興協会

■ゆうぴん振替口座■　口座記号：00150-0　口座番号：551990　口座名：イーグル・アフガン復興協会

問合せは『ウェッブ・アフガン』【野口壽一・金子明】

情報提供　私（大野遼）は、今「加藤九祚記念館　対話の館」を霞ヶ浦を臨む茨城県かすみがうら市牛渡に設置、顕彰碑を設置するため努力しているが、いずれ茨城県に「ユーラシアは一つ」と発信する、世界に誇る「ユーラシアシルクロード文化村」を立ち上げ、下記に記した「北方叢書」も壮大な加藤九祚記念館の中に実現する。

● 日本における小さな「アジア」から大きな「アジア」へ

（加藤先生と江上波夫）江上波夫さんは、1930 年満洲国建国の前年に北大学留学生として内モンゴルを 3 回旅行し、翌 1931 年 6 月から 8 月にかけて東亜考古学会の内モンゴル調査団（4 人）の中心メンバーとして張家口から東スニット経由 1150 キロの踏査を敢行し、戦後 1967 年「騎馬民族国家」（中公新書）を発刊していた。私は京ボルドーさんの案内で東スニットを訪問し、江上さんは、加藤先生とも懇意にしており、加藤先生の執筆活動を援助、私が加藤先生を核として日本を代表する研究者と一緒に創設した北方ユーラシア学会の初代会長、私は事務局長だった。私は学会を通して、メディアの記者をしながら、アルタイ山脈のパジリク王墓発掘、渤海港湾遺跡発掘、「アルタイ・シベリア歴史文明展」の総合プロデュースをした。「加藤九祚記念館協力委員」のロシアのデレビャンコ、モロージンはアルタイ、シベリア研究の第二世代のリーダーで加藤先生とはシベリア考古学の父オクラドニコフ以来の親しい友人で、加藤先生を通して多くの日本人研究者と交流があった。

日本は戦後、昭和二十三年五月、民族学の岡正雄、考古学の八幡一郎、東洋史で考古学の江上波夫、が司会を石田英一郎が務め、三日間にわたり座談会「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」が開催された。中国、朝鮮、日本という「小さなアジア」から「大きなアジア」への歴史学界、考古学会の渇望に応えようとしたものだった。東南アジアからインド、中東を視野に入れた「大東亜」（大川周明は志那天竺日本を加えた三国を大東亜圏と呼んだ）の拡充へのニーズだった。1980 年 NHK 特集でシルクロードという言葉に関心を呼び起こし、ユネスコは 1988 年、シルクロード対話の道プロジェクトをスタートした。このプロジェクトの責任者が服部英二さん（ユーラシアンクラブ名誉会長）だった。

（東亜考古学会の創設）生活困窮が深まる中で反キリスト教運動を進める宗教的指導者による義和団（主流は白蓮教徒＝元を滅ぼした明教）が「扶清滅洋」を掲げて清国の西太后の支持を受け、8 か国植民地帝国連合軍と戦った。当然のように敗北し、日本も植民地帝国側の一員として兵を派遣し、支払われた賠償金が東亜考古学会創立（1926 年）の資金

（北京大学と東方考古学協会を創設）京都を代表する浜田耕作、東京を代表する原田淑人／両人とも日本近代考古学の父、が北京大学の馬衡、沈兼士両教授と協議し創設。

（朝鮮総督府に朝鮮古蹟調査委員会創設）1916 年、朝鮮総督府の植民地政策として文化財の調査保存を目的として古蹟調査委員会を発足させ、1902 年以来古建築調査、1906 年深刻で中国古建築研究を行っていた関野貞が委嘱され「朝鮮古蹟図譜」を発刊している。

（加藤先生と井上靖）昭和二十五年シベリア抑留から帰国した加藤先生が、ロシア思想史からシベリア・西域をフィールドとする研究者に転身して発刊された「シベリアの歴史」そして「ソグドとホレズム」で紹介された加藤先生の翻訳によるロシア人研究者の論文を通して、当時の日本を代表とする大陸を視野に活動する研究者は、西域、中央アジアの世界に触れた。この前後、1965 年と 1968 年、加藤先生は井上靖さんの懇請でシベリア、中央アジアの取材旅行に同行。井上靖さんは、1968 年 10 月 6 日から朝日新聞紙上で「西域物語」の連載を始め 1969 年 3 月 9 日まで続けた。1969 年 3 月から日本経済新聞社が東京国立博物館でエルミタージュ博物館所蔵品展「スキタイとシルクロード展」を開催、この展覧会の展示品と関係が深いということで「ソグドとホレズム」は「西域の秘宝を求めて　スキタイとソグドとホレズム」のタイトルで出版され、井上靖氏が「序文」を寄せた。この序文の中で、井上靖氏は、加藤先生のシベリア・中央アジアに関する一連の訳業を北方叢書として出版する企画のあったことを明かしている。「東アジア」「大東亜」を超えた中央アジア・シベリアを含めた「アジア」そして「ユーラシア」の学問を視野に入れた叢書の構想が「北方叢書」であった。その中にはアルタイ学も含む。

【連載】　＝秘められたシルクロード＝　加藤九祚先生に捧げる　服部英二先生に感謝

私大野遼は、子どもの頃から、曰く言い難い、暗闇のある世界と一緒に生きてきた。第二次大戦（子供頃は大東亜戦争とは教えられていなかった）後敗戦とともに中国から引き揚げてきた両親は川越の引揚者住宅に住んでいた。仲の良い近所の子供たちの中で小学校 3, 4 年生の頃の私は、ある日、裏、北側の道路を挟んで反対側の子供たちと、仲の良い引揚者たちが住む一角の子供たちが、道路を挟んで石を投げ合う合戦のような「遊び」をしているのに誘われた。私は道路の反対側の醤油屋にお使いで「波の花」（塩；おばあさんに教えられ得意になってそう言っていた）を買いにちょくちょく行っていた。そこに親しくしていた年上の友達もいたので、参加しなかった。小学校上級年になった頃道路の反対側に「差別」された場所があると聞いた。小学校の先生から少し遠回しな言い方で暗に言われた。私は新聞配達でその地域を担当し、納豆売りの販売地域の一つであった。小学校の高学年で私は、古本屋でドストエフスキーの「罪と罰」「カラマーゾフの兄弟」を購入読み始めたことがある。大陸に興味を持ち始めた頃だったが、2 つとも途中でやめた。なぜか。描かれている世界が、詳しくは書かないが、私の住む世界とそっくりでうんざりしたからだ。パールバックの「大地」は読んだが、これも同じような世界で、私には当たり前の世界をなぜ書いているのかという程度の感想だった。ショーロホフの「静かなドン」も挑戦したが赤軍白軍の世界や人間模様はロシア遠方の世界で、新聞配達少年には手の届かない世界だった。大陸を知りたいという気持ちは中学にはいっても続いたが、中学に入ってからは、一年生の時は早朝のヤクルト配達と柔道、計算尺部で忙しく、読書とは遠のいた。授業では、英語の時間にずっと疑問を持っていた。日本人なのになぜ英語を勉強しなくてはならんのかと手を抜いた。その影響はあとを引いた。小学校の頃エスペラントに興味を持って、自分流の新しい文字を作ることに没頭していた時期があった。両親は、引揚者住宅を改造し、雑貨屋、お好み焼き屋、など必死に働き、父親は毎朝、家の前の道外れまで行って朝日を拝んでいた。雑貨屋は、私がつまみ食いしたり、近所の貧しい子供にただで分け与えたりしていたので間もなく廃業した。・・・・60 年以上も前のことである。私は今、やっと大陸と日本が見えた、と思う。残酷なイスラエルのガザ侵攻（植民地の拡大）、ロシアのウクライナ侵攻（プーチンのナルシズムと米国の挑発）も含めてだ。私は東京裁判のパール判事の理想、勝海舟や西郷隆盛同様私が尊敬する重光葵の『巣鴨日記』、日本に原爆を投下したトルーマンと対立したマッカーサー、ルーズベルトの開戦責任を証言したハミルトン・フィッシュやハーバート・フーバー元米国大統領の発言、イマヌエル・カントの『永遠の平和のために』などを通して、私なりの妄想の世界だが、未来へのトンネルではないか、と考えている、展望もある。その一端を、『シベリアの歴史』（紀伊国屋書店）以来、加藤九祚先生の後背を拝して活動し、考えたことを紹介するのがこの連載である。メディアの記者をしながら創設した北方ユーラシア学会（会長江上波夫、田村晃一、事務局長大野遼）、メディアを途中退職し、旧ソ連崩壊を目の前にして立ち上げた NPO ユーラシアンクラブ（名誉会長加藤九祚、創設 30 周年を機に名誉会長に服部英二さん就任）を通して、今は鬼籍に入られた友人も含め、多くの仲間に助けられながら考えたことである。

連載の題名は「秘められたシルクロード」である。私は、2021 年、中央アジア・タジキスタン共和国の文化遺産の一部を紹介したタジキスタン共和国の元外務大臣（元駐日大使）ハムロホン・ザリフィ氏が著した『タジクの黄金遺宝」の日本語版『秘められたシルクロード　タジク・ソグドの黄金遺宝　ソグド人パミールから奈良へ』を 40 年以上も昔のメディアの記者仲間と特定非営利活動法人ユーラシアンクラブの仲間の協力で発刊した。2016 年 7 月 7 日、駐日タジキスタン大使館で加藤先生がザリフィ大使に日本語版発刊を依頼された際、私に協力を依頼し、二ヵ月後ウズベキスタンの仏教遺跡発掘中に亡くなった。私は加藤先生の遺言を実現するため発刊に取り組んだ。私の仲間は発刊に強く反対した。そのうちの親しい支援者 2 人は、発刊の年に亡くなった。随分心配してくれた。大野がやることではない。タジキスタン政府がやればいいではないか、とも言った。日本語版の発刊は大変困難な作業だった。多くの人の支援がなければできなかった。服部さんはじめユーラシアンクラブの仲間、友人、知人から多額の寄付をいただいた。地元新聞社の掲載記事を通して知ったシルクロードファンが発

刊の協力として事前購入申し込みもしてくれた。最後は、加藤先生を知る横浜のご婦人が、私の苦境を知って電話して、高額の支援を申し出ていただき、出版のめどが立ち発刊に至った。ご婦人と、特に加藤先生に感謝している。私は、ご婦人から電話があった時、「加藤先生が降りてきた」と思い、改めて加藤先生がそばに居ると受け止めた。以来、加藤先生と語り合いながら生きている。日本語版発刊作業の過程では、校正、内容、書名、校訂デザインで、著者らとうまくいかなかった。詳しくは書かないが著者とは、著者の愛国主義的姿勢と、昔があるから今がある、という加藤九祚先生から継承した私の姿勢との齟齬だったと思う。本来、タジキスタン政府が助成して発刊されるべき著作だったと考えている。この本は日本の読者はほとんど興味を示さないことを気遣って、服部英二元ユネスコ事務総長特別顧問から、サブタイトルとして「秘められたシルクロード」を表題にしたらどうか、と提案いただいた。この提案は、加藤九祚先生が生涯にわたって拘ったソグド人の役割を読者に再考させ、この本の意義を的確に評価したサジェスチョンで、ありがたかった。日本語版は、昨年（2022 年）加藤九祚先生の生誕百年に合わせて完成することができた。服部さんは、2010 年、全国日本学士会から「多年、ユネスコ活動に寄与すると共に、教育文化の振興発展に貢献した業績」を賞して「アカデミア賞」を受賞している。

「秘められたシルクロード」の「シルクロード」は、服部英二さんがユネスコの文化事業責任者として世界の政府機関、研究者に呼びかけて実施した「シルクロード・対話の道総合調査（1988 年から 5 年計画）」で世界に知られたプロジェクトで、服部さんは「シルクロードは、陸の道、海の道を問わず、何よりも〈文明間の対話〉の道であった」と呼び掛けていた。2013 年、中国共産党の習近平総書記が世界支配の戦術の一つとして唱えている「一帯一路」は、服部さんが提唱したシルクロード「陸の道、海の道」を指していると想定されるが、「対話の道」を「物流網」にするため「債務の罠」で港湾を取得するなど、旧植民地帝国が世界各地で取得した「租借地」、「植民地」を再現する動きになっている。これはしばらく後で触れるが、私が第五の植民地帝国と呼ぶ所以である。

「秘められたシルクロード」の主役は、ソグド人（スキタイ、サカ人と同系の牧民/ソグディアナからバクトリアを拠点にアジア大陸全土にコミュニティを広げ交易に従事した）であった。

とりあえず、加藤九祚先生がシベリア留学（抑留）から国立民族学博物館教授、ロシア科学アカデミー歴史学名誉博士になる過程で、私はアルタイ山脈でパジリク（アルタイ山脈のスキタイ人=ソグド人の仲間）文化の凍結王墓発掘プロジェクトの準備をしていた。私大野遼にとってもずっと気になっていたのがソグド人であった。そこでソグド人を切り口に見える世界の一端を、加藤先生の著作も頼りにして描いてみることにする。

● ソグド人

私は、この日本語版発刊では、別冊特集を用意し、ソグド人の世界を知ってもらおうと考えた。その背景を描く。加藤先生の背中を見ながら、日本だけでなく大陸の人と文化の成り立ち、国家を支配する優勢な民族の興亡、先住民族と呼ばれる少数民族や、人類史の狭間で世界各地に暮らす少数民族、などに関心を持ってきた。そのため、メディア在職中の 1986 年、加藤九祚先生を核に、加藤晋平筑波大学教授、松本秀雄大阪医科大学学長、奈良国立文化財研究所の坪井清足所長、田中琢埋蔵文化財センター長（その後所長）、佐々木高明国立民族学博物館長らが京都のホテルに集い、話し合い北方ユーラシア学会を立ち上げ、会長に江上波夫、事務局長に大野遼（私）を創設した。、1991 年 8 月、ゴルバチョフ旧ソ連大統領（大統領来日時の日ソ交換公文でアルタイ山脈のパジリク凍結王墓発掘が決まった）の拉致事件を機に、私は北方ユーラシア学会退任を決意、北方ユーラシア学会はその後、大貫静夫東京大学教授（当時）が事務局長に就任した。私は、旧ソ連崩壊後、広く日本人の協力を得て何とか力になれないかと考えて、新聞を通して広く参加を呼びかけて少数民族村の視察ツアーを実施し、ハバロフスクの政府庁舎でシンポジウムを開催しユーラシアンクラブの設置を提案。少数民族に敬意を表することが人類の未来に貢献すると考え、手持ちの資金と支援者の多額の支援金を運用し、日本海対岸の先住少数民族代表を日本に招き、先住民族村の振興を目指し、九段会館でシンポジウムを行いユーラシアンクラブが誕生した。死屍累々の活動の中で、ソグド人と出会うが、これは別稿。

ユーラシアンクラブ創設以前私は、北方ユーラシア学会の活動で、ウラジオストクを訪ね、極東大学のシャフクーノフ教授の自宅に招かれ、教授が大事にしているス

キタイ関係の書籍をプレゼントしていただいた上、ウスリースク近くにソグド人の集落遺跡があることや南方シルクロードに対して北方草原のテンの道（クロテンの毛皮の交易）があったとの自説を聞かせていただいた。ウラジオストクの歴史民俗博物館に収蔵されれている石板には突厥文字・ルーン文字が書かれているのではないか、とシャフクーノフさんは想像していた。後によく理解したところだが、ソグド人と突厥の人々の関係は深く、宗教など突厥がソグド人から深い影響を受けて居た。突厥文字についてはアラム文字を公用語（共通語）にしていたアケメネス朝ペルシャ→ソグド文字→突厥文字→渤海石板文字の系譜が可能であろうと考えている。ちなみにシャフクーノフさんは、渤海の皇帝の名前がペルシャの文献で知られていた、と話していたが、詳しいことは失念した。これもソグド人—突厥経由であろう。

私は、「極東ロシア」で、奈良時代から平安時代にかけて日本にもかかわり深い渤海国が日本に使節を派遣した豆満江河口の港湾遺跡の発掘プロジェクトやウラジオストクでの渤海シンポジウムをプロデュースしていた。そのためウラジオストクに 3DK のアパートを購入し、学術交流に参加する研究者や少数民族との交流にやってくる日本人の宿泊場所として利用していたが、北方ユーラシア学会のパートナー・ソ連科学アカデミー極東支部の学術書記がアパートの名義を自分の息子に登録し、略取された。こんなことがありながら、ウラジオストクで日ロ（ソ連）初の渤海シンポジウムを開催したり、渤海だけでなく、沿海地方の都城調査を続けていた。渤海河口の渤海港湾遺跡には日本人としては私が初めて立った、のを誇りにしている。日本ではメディアの記者時代に、渤海をめぐるシンポジウムの為富山県を訪問したり、日本海対岸の渤海国に思いをはせていたものである。渤海国港湾遺跡と渤海と日本の交流をめぐる課題についてロシア人研究者と日本の研究者が意見を交換したのも初めてである。これ以降、田村晃一青山学院大学教授を代表とする渤海港湾遺跡クラスキノ土城の調査が十年にわたって繰り広げられた。来日渤海人に当然ソグド人もいた。私は、沿海地方と日本の秋田マタギの狩猟民族の比較調査や加藤晋平氏を中心とするアルタイ・シベリア地域と日本列島の旧石器時代の比較調査についても北方ユーラシア学会の事務局長としてお手伝いし、ソ連科学アカデミー・シベリア支部考古学民俗学研究所（A.P.デレビャンコ所長/今回、加藤九祚記念館協力委員に就任していただいた）が行ったアルタイ・シベリア地域の発掘・収集品を日本で紹介する「アルタイ・シベリア歴史文明展」をプロデュースした。また、松本秀雄大阪医科大学学長の抗体遺伝子 GMst 遺伝子を標識とした人類遺伝学調査プロジェクトも実施した。

北方ユーラシア学会が行ったアルタイシベリアでのプロジェクトで最大の日ソ学術交流は、ロシアの考古学者の発掘で世界が注目してきたアルタイ山脈の凍結王墓古墳の発掘であった。そのため、私は加藤九祚先生と 5 年間毎年夏、アルタイ山脈に通った。アルタイ山脈・チョールヌィアヌイ川の岸辺に聳える岩塊にポッカリ空いたデニソワ洞窟を拠点に旧石器時代の人類の痕跡を追及しているロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所長の A.P.デレビャンコさんは加藤九祚先生を心から敬意もって遇していた。

シベリア・アルタイにおける考古学史は、バイカル湖湖畔に生まれた A.P.オクラドニコフ氏が礎を築き、オクラドニコフは「シベリア考古学の父」とされる。オクラドニコフ氏の薫陶を受け、シベリア・アルタイの考古学を継承するのがデレビャンコ氏でアカデムゴロドクのロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所を拠点にシベリア・アルタイの考古学者を牽引しオクラドニコフ時代を継承している。氏はデニソワ人を見出した。

私は、1991 年夏に行われたアルタイのパジリク凍結王墓発掘の二年前、日ソ共同の発掘調査のための古墳を確定するためアルタイ山脈を訪問した。現在ロシア科学アカデミー会員である V.I.モロージン博士と二人でジープに乗り、アルタイ山脈ウコック高原を走り回った。途中モロージン博士が「ここにはナスカの地上絵のような場所がある」と言い、案内してくれた。そこには石が集積してラインを描いている場所が広範に広がっていた。アルタイには、まだ世界には知られていない古代遺跡が山脈の奥地には眠っている。日ソ合同調査で発掘する「凍結王墓」はこの時二人で決めた。これは北方ユーラシア学会の事務局長としての活動だった。私はメディアの記者として連載「騎馬回廊 2000 キロ」（6 回）、「神秘の黄金山脈　日ソ合同発掘調査」（10 回）を執筆した。私は帰国後外務省と協議し、1991 年 4 月に来日したゴルバチョフ大統領と海部俊樹首相との共同宣言に際して交換公文で「ソ連科学アカデミーと北方ユーラシア学会との共

同発掘」としてアルタイ山脈のパジリク王墓が確定された。この凍結王墓を遺したパジリク人（スキタイ）はソグド人と深いかかわりがある。別項で記す。

● 「ユーラシアは一つ」は人類の未来を示すトンネル

シベリア、アルタイ山脈の 400 年に渡るロシア人による学術的蓄積に関心を持ったのが、韓国慶尚北道出身の日本人加藤九祚さんであった。

加藤先生は日本統治下の韓国から、小学校の頃山口県の兄を頼って宇部市の私立長門工業学校の職工育成課程で学び、校長、教諭、地域の人たちの支えで懸命に勉強し、小学校の代用教員に推薦され、横浜に移り、高等学校入学者検定試験に合格し 1942 年 4 月、上智大学に入学した。五族協和、大東亜共栄圏を夢見て日米開戦真っ只中での青春の転機だった。（1986 年 3 月国立民族学博物館で開催された学術博士取得記念祝賀パーティで配布された加藤九祚の人生の歩みを記した「わたしの一週間／火曜日」から）。私は高校一年生の頃川越駅前の書店で手にした加藤先生の「シベリアの歴史」（紀伊国屋書店）を手に取り、加藤九祚という人に感動し、10 年後国立民族学博物館の研究室で面会してから半世紀にわたり、師事して今日に至る。加藤先生とともに行ってきたプロジェクトは多岐にわたるが、最後の仕事、それが「秘められたシルクロード　タジク・ソグドの黄金遺宝　ソグド人パミールから奈良へ」（ハムロホン・ザリフィ著　ユーラシアンクラブ発刊）であった。いや違う。私がタジキスタン共和国を始め中央アジアでの活動に失望して、2020 年に茨城県かすみがうら市に取得した霞ヶ浦を臨む場所に設置した「加藤九祚記念館　対話の館」を拠点に、改めて「ユーラシアンクラブ・オンライン」を立ち上げ、茨城県に加藤九祚先生の志を継承し「ユーラシアは一つ　ユーラシア・シルクロード文化村」を創設し、立派な加藤九祚顕彰碑を設置することである。活動拠点となる「対話の館」にも「加藤九祚顕彰碑」を設置するため努力する。ソグド人が切り拓いたシルクロードは、加藤先生の出身地の新羅、そして揚州―五島列島福江島経由で日本につながり茨城県・栃木県まで達した。ユーラシアンクラブ名誉会長が世界で初めて、ユネスコの文化事業責任者として発信した「対話の道　シルクロード」の東の終着駅であった。ソグド人は、パミール（太陽神の足）でやってきた。そこは太平洋から人の住む陸地に最初の太陽が降り注ぐ場所だった。今「対話の館」がある。理事長江藤セデカはソグド人の子孫である。（続く）

● **今後、人類の未来を曇らせる、ウクライナとロシアの悲惨な「戦争」、イスラエル（パレスチナ植民地帝国）とハマスの悲惨な「戦争」。「植民地帝国時代」を止める「精神文化」と「軍事力」の分離（廃止でない）を考える。**

● ユダヤ人は紀元前二千年紀から流浪と内部紛争、重層的な支配の歴史を繰り返し、最後はローマ帝国によるディアスポラによって離散。ドイツのホロコースト、ロシアのポグロムを経て、シオニズムの帰還の地として、またローマ帝国原罪を贖罪するイギリスの密約の地としてイスラエル国が誕生した。それは 1948 年。以来、イスラエルがやっていることは「軍事力による領土拡張」。ローマ帝国の子孫たちイギリス、フランス、ドイツ、ロシア地球上でやってきた差別と殺戮、そしてホロコースト・ポグロムに他ならない。第六の植民地帝国のやり放題な暴虐を誰が止めるか。それはローマ帝国の子孫イギリス、フランス、ドイツ、ロシアそして戦勝国連合国連を作り、イスラエルの後始末をイギリスから委任された米国の責任だ。日本は、ポツダム宣言（1945 年 7 月 26 日）受諾後（1945 年 8 月 14 日）も米軍による占領政策が続いている。この解決も米国の責任だ。

発行：特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ　発行人：大野遼、江藤セデカ。住所：〒300-0213 茨城県かすみがうら市牛渡 1796-1。E-MAIL： paf02266@nifty.ne.jp 会費、ご寄付は,郵便振替：00190 -7-87777 ユーラシアンクラブ/お振込の場合：ゆうちょ銀行〇一九店当座預金 0087777 ユーラシアンクラブ。会費は正会員年間 1 口 3,000 円、学生会員 1,000 円、賛同会員 2,000 円。一口以上のご協力をお願い申し上げます。無断転載引用を禁ず。

Non Profit Organization Eurasian Club

http://eurasianclub.org/

2023 年 10 月 30 日

編集後記：ガザ地区の少女が「私はこれからどうしたらいいかわからない」と姉妹の間で泣き叫んだ。「人類の未来は、死後の平和」かも知れない。私は少数民族への敬意が人類の未来の鍵を握ると思って 30 年以上活動してきたが、「目先の利益」「目先のナショナリズム」しがらみ優先で、周りの人々の暮らしや歴史や文化、世界の人々の悲惨な現実に目を向けようとする人はほとんどいなかった。そして、私も例外ではない、という事実に打ちのめされている。私は何もすることができない。無力だ。私の当面の目標は、「加藤九祚顕彰碑」「ユーラシアは一つ　ユーラシアシルクロード文化村」の立ち上げ。ささやかなことに思える。何とかする。（お）